

カリキュラム・マネジメントによる SEL と道徳教育の融合

荒木 寿友(本学教職研究科教授 教育方法学 国際教育)

この 10 年くらいの間にメジャーになってきた言葉に、社会情動的な学習(social emotional learning:以下 SEL)が挙げられます。書店の方には SEL 関連の本がたくさんありますし(「非認知的な能力」と表現している本も)、OECD も社会情動的スキルを幼児期や児童期に育むべき資質・能力として取り上げました。

日本の SEL の第一人者である小泉氏は SEL を「全ての子どもや大人が、健康なアイデンティティを発達させること、情動(感情)をコントロールして個人や集団の目標を達成すること、他者への思いやりを持ちそれを表すこと、支持的な関係をつくりそれを維持すること、そして責任と思いやりのある決定ができるように、知識とスキルと態度を身につけて使えるようになる過程」(渡辺・小泉、2022 年)とまとめました。「使えるようになる」、つまり、日常生活で活かせるようになることが目的なのです。

SEL は一般的には、自己理解・社会性・共感力・感情抑制力などの育成のために行われるプログラムの総称で、自己への気づき、自己コントロール、他者への気づき、対人関係、責任ある意思決定の 5 つの視点から成立しています。これらのプログラムの実施によって子どもたちの問題行動の減少、学力向上などが期待されています。さらには、安全安心なクラスの場作りとして SEL の活用も考えられます。

勘の鋭い方ならお気づきかもしれませんが、SEL で取り上げられている自己や他者への気づき、社会性、共感といったキーワードは、道徳教育においても扱われる事が多いワードです。実際、アメリカの人格教育(道徳的価値をしっかりと教え込む道徳教育を行う立場)の団体である Character org.は、SEL と人格教育を統合する Character and Social-Emotional Development (CSED)を提示しています。

Character org.は「正直」や「思いやり」といった道徳的価値は、「宗教や文化、民族を超えて私たちの共通の人間性を表現している」と示しています。確か

にそうかもしれません。しかし「正直」が具体的な状況においてどう振る舞うことになるのかまで考えないと、徳目だけを教え込む「徳目主義」に陥ります。従来の人格教育に SEL という実効性のあるプログラムを統合した背景には、徳目主義に陥りがちな人格教育の弱点を乗り越えようとした意図があるかもしれません。

では、日本の道徳教育に SEL はどのように組み入れていくことができるのでしょうか。道徳は基本的に他者との関係性の中に生じるので、SEL の自己と他者との関係性を円滑にしていくという教育の視点は、非常に類似しています。一方で道徳科は、道徳的行為を積極的に扱っていないという点、道徳科の授業が自己にベクトルが向いているところや価値理解がベースになっているという点で SEL とは異なります。

現状では、SEL の実践が学級活動を中心としながらも、道徳科や特別活動、総合的な学習の時間など、教育課程内外の学びを関連させて実施されています。山田氏(2020)が SEL の実践が規範的行動と感情機能に与える効果の検討をした結果、実施回数が 7 回以上になると効果が出るということがわかりました。1 回の時間が 10 分と短くても継続すると効果が見られやすく、同じワークであっても交流するメンバーを変えるなどして複数回行くと効果が見られるようでした。

もはや単独の教科を習得するだけでは、変化の激しい時代の波を乗り切っていけないでしょう。波を乗り切る力、つまり世の中の問題解決に必要な力を養っていくためには、知識(教科など)+思考力(教科、総合、道徳など)+実践力(総合、特別活動)+価値観(道徳教育)を結びつけて一体的に育てていくカリキュラム・マネジメントがさらに必要になってきます。

・小泉令三、渡辺弥生編著『ソーシャル・エモーショナル・ラーニング(SEL)』福村出版 2022 年。

・山田洋平『対人関係と感情コントロールのスキルを育てる中学生のための SEL コミュニケーションワーク』明治図書、2020 年。